

府

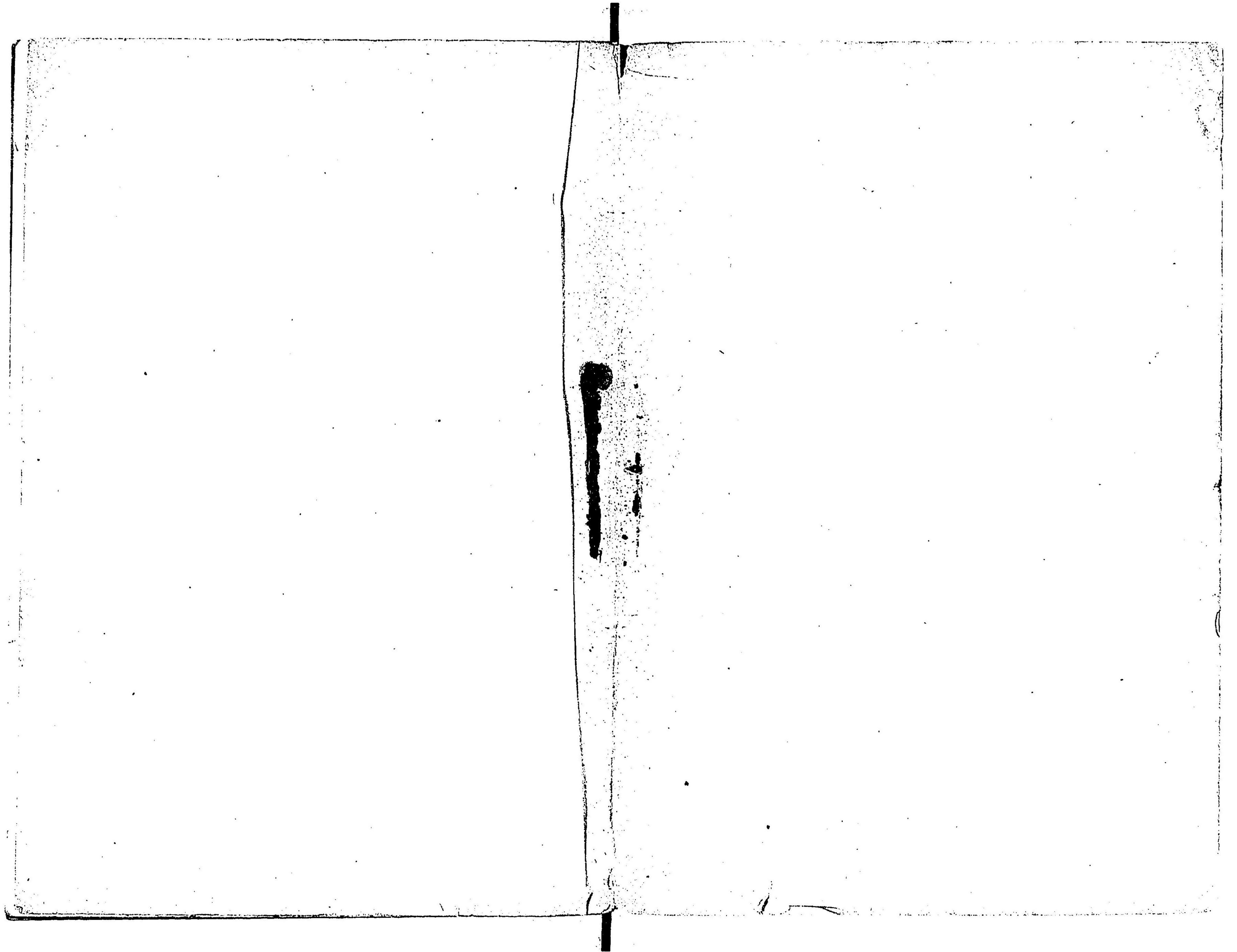
笑



らくのひらわ

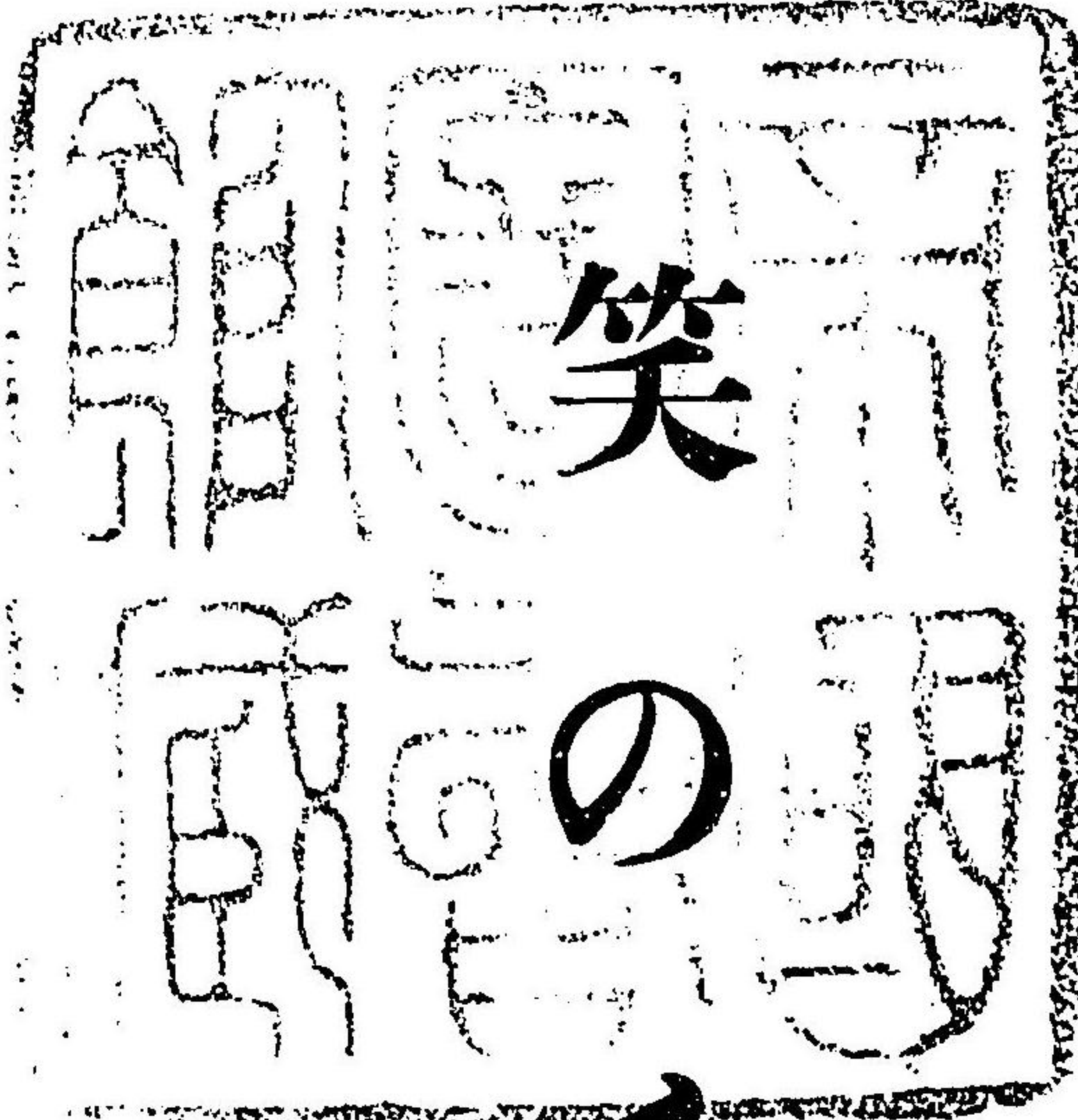








特63  
246



夢野浮橋編

く

ら



内外出版協會





序

夫れ笑ふ門には福來り、家内の不和は貧乏神の巢窟にして、笑つて暮らせばこそ、財産も出來れば、長壽も得られ、面白嬉しく世を渡りて、功も成り、名も遂げらるべし。野史夙に福神より此の有難きを託宣を受けたれど、東奔西走、遊樂に忙しくして、兎角笑ひの種子を蒔くべき好機會を得なんだが、今や遊び草臥れて稍、閑暇の身と成りたれば、此の刹那を利用して、聊か笑ひの端緒を開かんと、先づその第一着として本編をものせり。若し夫れ本編に漏れたるものに至つては、更に再び述ぶることゝなるべし。



笑

府

(わらひのくら)

謎

△煙草專賣局とかけて

夏期の淫雨つゞきと解く

心は氷店(小賣店)を泣かせる

△偏屈な人の獨旅とかけて

下手な魚釣人と解く 心は釣れなくて(伴侶なくて)樂み

△明鳥とかけて

高尾の身受と解く 心は陸奥の金(六つの鐘)に伴れる



△漬物とかけて

石川五右衛門の最期と解く 心は重い仕置(重石置)

△年末とかけて

岩田帯と解く 心は拂ひ(腹へ)締め括る

西南北三方の塞がりと解く 心は東方(逃亡)より外がない

△下手な落語家とかけて

仙臺萩の鶴千代君と解く 心は御菓子食はない(可笑しくはな

い)

夏の末と解く 心は直に秋(厭倦)が来る

△月とかけて

新聞の號外賣と解く 心は道駈ける(盈ち虧ける)

△低氣壓とかけて

夜深に流す按摩の笛音と解く 心は物凄くビュー!

△赤兒とかけて

新聞の號外と解く 心は早く配達(跛ひ立つ)を待つ

△財産家の逃亡とかけて

反物の仕上げと解く 心は押板から(惜い財寶)置く

居飛車の詰と解く 心は角前手(かくまひて)が多い

△狐鼠狐鼠泥坊とかけて

辨慶の勸進帳と解く 心は富樫(科死)は許す

△貧乏人の衣服とかけて

白酒と解く 振うて注ぎ(舊うて綴ぎ)



△鬼一法眼三略の巻とかけて

動物園と解く 心は虎象（虎藏）が呼物となる

△乞兒とかけて

難産の療治と解く 心は逆兒も斬る（酒菰着る）

難船の乗客と解く 心は板抱いて（戴いて）助かる

△目ざまし時計とかけて

新聞の號外賣と解く 心は駈けなくてはならぬ（掛けなくては

鳴らぬ）

△通人の遊びとかけて

百日の早魅と解く 心は能くも照る（能く持てる）

△安物買とかけて

雪と解く 心は傘（黴毒）が重くなる

△亞米利加人とかけて

結核患者と解く 心は又しても肺咳嗽肺咳嗽（排斥排斥）

△面白くない小説とかけて

寒中と解く 心は節分で明く（拙文で飽く）

△往時の勝力士とかけて

快く寝られる晩と解く 心は蚤の少ねえ（能見宿禰）

△往復はがきとかけて

新聞の號外と解く 心は出せば返事（變事）がある

△氣さくな幽霊とかけて

海女の戯れと解く 心は浦見晴らして（怨み晴らして）慰む



△劇場の幽霊とかけて

白酒と解く 心はドロム〜になつて出る

△茶人とかけて

庭の手入れと解く 心は夏芽(棗)を好いて居る

南海の難所と解く 心は阿波に鳴門のみ(泡になると飲み)

△暮れの市とかけて

赤穂の義士と解く 心は諸士名を得る(諸品を賣る)

△やかましい姑とかけて

亂髪の女と解く 心は夜目(嫁)に恐ろしく見える

△彼岸詣とかけて

歌麿の錦繪と解く 心は見るも〜往時の美人だらけ

△貧乏人の寢道具とかけて

下戸の好物と解く 心は煎餅に榊餅

△此の節の豆腐とかけて

氣の折れた老人と解く 心は逐日に柔かくなる

△汽車旅行者の無事歸着とかけて

坊主の放免と解く 心は毛が(怪我)なくてお芽出たかつた

△菱餅とかけて

藁灰と解く 心は火長く持つ(雛が供物)

△痲癩持とかけて

消炭と解く 心は直さにおこる

△太閤の朝鮮征伐とかけて



一向宗いつかうしゅうの法話はふわ聴聞ちやうもんと解とく 心こころは往生わうじやう（王城わうじやう）を心こころ掛けて行く

△電車でんしゃの乗客じやうきやくとかけて

平家へいけの大將たいしやうと解とく 心こころは中なかに忠度たうのり（無錢たのり乗車のり）も混まじつて居ゐる

△遺言ゆいごん狀じやうとかけて

雪ゆきと解とく 心こころは止とんでから搔かく（病やんでから書かく）

△軍隊ぐんたいとかけて

歌舞かぶき伎座ぎざと解とく 心こころは芝翫しきわん（士官しきわん）が采配さいはいを振ふつて居ゐる

△妾めかけの目見得めみえとかけて

兜かぶとと解とく 心こころは顔世かほよも改あらためる（面夜かほよも檢あらためる）

△へボ役者やくしやとかけて

四書しよの中ちゆうの一部ぶ進上しんじやうと解とく 心こころは孟子まうし進あげます（申上まをしあげます）

△明治めいぢ四十三年しじゅうさんねんとかけて

神詣かみまうでを濟すませて歸かへつた人ひとと解とく 心こころは鳥居とりかの中なかに居ゐぬ（酉亥とりかの

中なかに戌いぬ）

蚊帳かやの外そとへ寢ねるワン／＼と解とく 心こころは蚊かの餌えい犬いぬ（庚戌かのえいぬ）

△赤兒あかごとかけて

お正月しやうげつと解とく 心こころは又または睦月むつき（股または襠褌むつき）

△地獄ぢごく狩かりとかけて

周しうの武王ぶわうの革命かくめいと解とく 心こころは殷亂いんらん（淫亂いんらん）を滅ほろす

△蓬萊ほうらいの島臺しまだいとかけて

破やぶれた蚊帳かやと解とく 心こころは吊つる（鶴つる）と蚊かめ（龜かめ）が舞まふ

△四斗しとう九升しゅうしやう四合しがつとかけて



大名四軒と解く 心は五藤、丹羽、六郷、内藤（五斗には六合  
無いと）

△辨慶の勸進帳を讀み上げた場所とかけて

水泳中の風邪と解く 心は裸體の咳嗽（安宅の關）

△有爵者とかけて

材木屋の泥坊と解く 心は木賊（貴族）

△節分とかけて

宮城野、しのぶの狂言と解く 心は代官が悪（大寒が明く）

△四月とかけて

編上げの靴と解く 心は紐（日も）長い

△農家の懶惰漢とかけて

支那の名木と解く 心はタガヤサン（耕さん）

△面白さうな演劇とかけて

若水と解く 心は早汲みたい（早く見たい）

△下手の長演説とかけて

趙の都と解く 心は邯鄲邯鄲（簡單簡單）

△白川樂翁公の政治とかけて

袴地と解く 心は横縞（邪）がない

△ランプ屋の地震とかけて

新聞の號外賣と解く 心は觸れながら駈ける（振れながら缺け  
る）

△つけやき團子四錢とかけて



四十二歳を一期に死ぬ男子と解く 心は厄死（八串）

△子供を欲しがる夫婦とかけて

六歌仙の中の美人と解く 心は小町（子待ち）

△漬菜とかけて

雪と解く 心は白く清し（白莖よし）

△小さな盲人とかけて

米商の土藏と解く 心は米藏（小盲目）

△田子の浦の歌人とかけて

無性な人間と解く 心は垢人（赤人）

△自動車とかけて

不平家と解く 心はブツ／＼言ひつゞける

△政友會とかけて

おはん、長右衛門と解く 心は桂川（桂側）で浮名を流す

△烟草專賣局とかけて

賣國奴と解く 心は國家（國華）を賣り出す

△口車とかけて

狸の船と解く 心は乗つたら大變

△道中雙六とかけて

夕立と解く 心は降り出す（振り出す）と直まに上がる

△洋酒店とかけて

裏店と解く 心は貧（饑）ばかり

△もの字とかけて



世界萬國と解く 心は日(ひ)の下にある

△兩國川開とかけて

勇士の苦戦と解く 心は火花を戰場(船上)に散らす

△洋算とかけて

子供を欲しがる人と解く 心は嬭(書か)なくては出来ぬ

△かゝあ孝行とかけて

日本國と解く 心は神さん(細君)を大事にする

△兩玻璃の時計とかけて

人力車の合乗と解く 心は仲好く見える

△沖の船とかけて

かけがねと解く 心は皆戸(港)に附く(着く)

△ペルリ騒ぎとかけて

絹物と解く 心は蠶(開港)が本

△家令とかけて

かけがねと解く 心は戸のさん(殿さん)に附く

△擊劔の試合とかけて

質屋の出入と解く 心は受けたり、流したり

△生意氣書生とかけて

干見世と解く 心は買ひ被る(開化振る)

△魚類とかけて

生れ附きの盲人と解く 心は見ずに(水に)育つ

△壓制政府とかけて



大生酔と解く 心は倒れるまで威張る

△酒泥坊とかけて

千本櫻と解く 心は静に忠信（静に只飲む）

△婚禮の晩とかけて

東京の市街と解く 心は車で（来るまで）忙はしい

△賤しいものゝ娘とかけて

送り狼と解く 心は顛ばせて食ふ氣だ

△金貸とかけて

暑中の賣物と解く 心は氷（高利）が多い

△猫と犬の假聲とかけて

西洋婦人の振袖と解く 心は似合はん（ニヤー、ワン）

△義貞の太刀投とかけて

歳暮の進物と解く 心は鹽引（汐引）が多い

△門の字とかけて

流行らぬ寄席と解く 心は内に入がない

△理髪師とかけて

高田の里の螢狩と解く 心は姿見の傍で狩る（刈る）

△高雄とかけて

夏の強盗と解く 心は吊手から（吊りてから）斬る

△蜘蛛網とかけて

人力車夫と解く 心は駆ければ（掛ければ）食ふ種子が出来る

△此の節の新佛とかけて



貧乏町内と解く 心は土藏(土葬)が少ない

△今日の人間とかけて

錐と解く 心は木(氣)ばかり揉む

△唐本の表紙とかけて

賣れない娼妓と解く 心はお茶引が多い

△銃鎗とかけて

小さな米屋と解く 心は春いたり、賣つたり、(突いたり、撃つ

たり)

△唱歌師とかけて

百姓と解く 心は肥料(音聲)が肝腎

△義士の人数とかけて

貧乏人の生活と解く 心は始終質(四十七)

△妊婦とかけて

ねぶとと解く、心は膿み出すまで (産み出すまで) 苦む

△下等のマツチとかけて

下白米と解く 心は春さ(點さ)が悪るい

△巧手な謎とかけて

藝妓の下紐と解く 心は安くは解けない

△造物主の骨折とかけて

百人一首と解く 心は天智(天地)が始まり

△官吏とかけて

大川の舟と解く 心は動搖が怖い



△藝妓とかけて

花柳病者と解く 心は鼻(纏頭)を氣にする

△浮氣娘とかけて

ラムネの罫と解く 心は尻がすわらぬ

△夏の笥とかけて

施物の出し切りと解く 心はもうさう(孟宗)はない

△質屋の土藏とかけて

山本みやげと解く 心は曲物入

△獄中の人とかけて

祭文と解く 心は出ろれんく(出られんく)

△まゝならぬ戀とかけて

木曾義仲と解く 心は栗津(逢はず)に苦む

△死後の苦勞とかけて

秋の蟲と解く 心は草葉の陰で鳴く(泣く)

△白井權八の笛とかけて

深草の少將と解く 心は一夜切り(ひとよぎり)

△出来合ひの頭巾とかけて

生漆と解く 心は直きにかぶれる

△夕月夜の打水とかけて

王道と解く 心は上が明らかで、下が濕ふ

△金貨の帳合とかけて

縁先の草花と解く 心はかぞへて樂む



△知らぬ事をせねばならぬ場合とかけて

蝶花形の斬り合ひと解く 心はまでく

△玻璃鉢の中の金魚とかけて

家根船の籠と解く 心は浮いたのが透いて見える

△病後の亂れ髪とかけて

箱入娘の初戀と解く 心は言ひたく(結ひたく)もあれば、怖くもある

くもある

△廉價煙草とかけて

夏の夜と解く 心は飲み香(蚤蚊)が悪い

△獨身者とかけて

無筆の人と解く 心は書かない(嫌ない)

△屑屋とかけて

理髪師と解く 心は髪を刈つて(紙を買つて)食ふ

△泥坊根性とかけて

強壯の人と解く、心は中々容易には病まぬ(止まぬ)

△上り足らぬ風船とかけて

餅の食ひ過ぎと解く 心は氣が重い

△佐渡の鑛山とかけて

破れた褌と解く 心は金が出る

△遊廓の素見とかけて

小野道風と解く、心は蛙に(買はずに)見惚れる

△兩國川の涼み舟とかけて



油屋九兵衛の立腹と解く 心は一つ目で艶書を裂く (炎暑を避く)

△女の請宿とかけて

秋の蟬の如しと解く 心は如秋蟬 (女周旋)

△業平朝臣の乗つた馬とかけて

隅田川の花筏と解く 心は色の隊長を長さ (長木) に載せて、

吾妻に下る

△仁木彈正とかけて

蚤と解く 心は身體痒い (原田甲斐)

△蟬丸とかけて

人ごみの中で蕃椒を燻すと解く 心は知るも、知らぬも大方の

咳嗽 (逢坂の關) だ

△鼠とかけて

花かるたの引手と解く 心は狐鼠狐鼠と引く



語呂合

△見たいばかりに惜しからぬ

奇才篝火度々謀る (楠正成)

△互にことばなきところ

謀りし僧が泣き男 (楠の泣き男)

△捨て人の爲の鉢の木

筆にこそ晴れの書置 (楠正行の書置)

△君を思へば徒跣

道を横たへ大蛇さし (漢の高祖)

△梶原平三景時の



羽柴が計慮稀の城（秀吉、洲の股白壁）

△まだ解け兼ねる薄氷（うすこほり）

仇取る鑑打つ謀士（同上、高松水攻め）

△一と筋に良人を思ふ（おも）

威の劔、賊徒を襲ふ（日本武尊）

△苦艱を免かれ今はハヤ

無念と飽くまでちから業（毛谷村六助）

△ト、ロ／＼と踏みならし

殿の心を汲むはなし（曾呂利新左衛門）

△さしもの剛氣もガバと爲り

鷲の尾城地の山を越し（一の谷案内）

△威勢を猜む眼より

智計ぞ善かる逆おとし（同上、さかおとし）

△通る人をぞ待ち居たる

亡ぶ死霊の波に立つ（船辨慶）

△また／＼く中に人の山

あらはる海に死霊の仇（同上）

△清め候ふほどに

圍碁で騒動起り（碁盤忠信）

△音こそ潮のみちひなれ

戻ると鏡引きし晴れ（景清鏡引）

△光り輝く月の夜に



騎馬に名高く藤戸乗り (藤戸の先陣)

△またも背後の山手より

海女も藤戸の淺瀬説き (同上)

△花にあらしは浮世のならひ

謀る佐々木が藤戸をわたし (同上)

△雪の夜あかり朝もどり

富士のやかたに仇を取り (曾我兄弟夜討)

△古歌のことばに似たるぞや

曾我の兄弟いさむぞや (同上)

△忠義の武士のわなにかゝり

勇士ぞ富士の穴見たし (仁田四郎忠常)

△地主権現の花ざかり

一文錢を川さがし (青砥左衛門藤綱)

△刃の中に人と爲り

波間に流す思慮の太刀 (新田義貞)

△みこしの竹を引つそぎやり

祈りの鐘を嫉妬に巻き (道成寺)

△引つそぎ竹のしゝつきやり

嫉妬に鐘を一途に巻き (同上)

△見れば見るほど、まがひもない

姫が嫉妬に蛇體と爲り (清姫)

△花に盛衰、月に影



和歌に誠妙降りし雨(雨乞ひ小町)

△雨戸(あまど)に合(あ)はせしあひくろ

和歌の智(わか)、眼前雨降る妙(がんぜんあめふ)(同上)

△たつきも知らぬ山中(やまなか)に

工(たく)みをしたる和歌の恥辱(わか)(草紙洗ひの小町)

△惜(を)しき中(なか)にもたかよりし

草紙洗ひ(さうしあら)の和歌恥辱(わか)(同上)

△ナニ惜(を)しからぬ此(こ)のいのち

才慮(さいりょ)にかへすぞの(ひ)と字(じ)(あふむ小町)

△當座(たうざ)の褒美(ほうび)にの(こ)しおき

老婆(らうば)の頓智(とんち)にぞの(ひ)と字(じ)(同上)

△心(こころ)をみかく種子(たね)と爲(な)り

強將智略瓶(がうしやうりやくかめ)をわり(柴田勝家)

△深(ふか)き心(こころ)もわたつみの

馬(うま)に湖上(こじやう)をわたる思慮(しりょ)(明智左馬之助)

△いとけなき身(み)の母(は)に逢(あ)ひ

思慮(しりょ)で焼きしも山路橋(やまぢはし)(張良の蜀の棧道)

△日頃(ひころ)の戀慕(れんぼ)を幸(さい)ひに

子房(しぼう)の賢慮橋(けんりよはし)焼きし(同上)

△刃(やいば)の中(なか)に人(ひと)と爲(な)り

焼(や)いたる山路(やまぢ)、思慮の橋(しりよはし)(同上)

△たい口開(くちあ)いたるばかりなり



欺き焼いたる山路の橋(同上)

△今も近江の片山家

智者の頓智も赤はだか(陳平)

△實に有難き法の道

鹽谷に仇し戀の意地(忠臣藏三段目師直)

△去られても殿御の宅

からめ手も徒黨の武士(同上、十一段目討入)

△相違あらざる自筆の状

草履仇なる一途の情(鏡山、尾上自害)

△まだ解け兼ねる薄氷

仇遂げはつの打つ草履(同上、おはつ仇討)

△さゝをかたげて千鳥足

皿を敷へて一人泣き(皿屋敷、おきく)

△地主権現の花ざかり

菊怨念の皿さがし(同上)

△わが子にひしと抱き付き

高野に父を慕ひ行き(荻萱、山の段)

△腹切ることまで此のやうに

花なるこのまで殿床几(同上、三つ目)

△女房づれの刃にかゝり

強盗公家の形なしあたり(五右衛門)

△木像の形もなく



勘定のかたりをなす (同上、壬生村)

△心も清き洗ひ米

殿御を慕ひかたみの畫 (二十四孝、八重垣姫)

△もみちも青き稻荷山

彫刻師も名高き左り業 (左甚五郎、お山人形)

△すでに伊勢路の山近き

常に渭水の濱に坐し (太公望)

△たつきも知らぬ山中に

矢文を射たる母が才 (近江源氏)

△人のこゝろの奥深き

木戸の外雨の送るやに (同上)

△よしなき凶徒の争ひに

餘儀なき證據の笠の二字 (阿漕平二)

△まだ解け兼ねる薄氷

嵯峨野へかくれ住む高位 (小督局)

△さらば煩惱の犬となりて

わざは僧正の術を授け (鞍馬山、僧正坊)

△かすく惜しき

授かる奥儀 (同上)

△扇を持ちて丁々々々

奥儀を教へ僧正坊 (同上)

△近江に石山秋の月



扇あふぎに射いし矢やは那須なすの弓ゆみ（那須なすの與市よいち）

△今いまも其その名なにながれたる

射いたる遠矢とほやに要かなりある（同上どうじやう）

△近江路あふみちなれや湖みづうみの

扇あふぎに晴はれや何いづれ規き模ぼ（同上どうじやう）

△時日じじつ遷うつさず山崎やまざきに

秘術ひじゆつ打うつつたるあかぢ小槌こづち（五郎入道ごろうにだうまさむね正宗まさむね）

△されば心こころの師しとばかり

稀まれな小僧こぞうの智ちも優まさり（一休和尚いつきうをしやう）

△しほり兼かねたるばかりなり

しの字じ稀まれな山やまに書かき（同上どうじやう）

△御老體ごらうたいの母人ははひと

和尚才をしやうさいの長ながしの字じ（同上どうじやう）

△心こころを磨みがく種子たねとなり

子供こどもと似にたる真似まねをなし（老萊子らうらいし）

△妙法蓮華めうほふれんげのとなへかな

饗應きやうおう千家せんけの手てまへ花はな（千せんの利休りきう、茶事さじ）

△さゝをかたげて千鳥足ちどりあし

業わざも濱邊はまべで一人坐ひとりざし（太公望たいこうぼう）

△受うけて見みようとう、ドウと打うつ

腕うでで未曾有みそいうの蒙古擊まうこうつ（元寇げんこう）

△しほり兼かねたるばかりなり



御法妙なる七字書き (日蓮上人)

△今宵夜深は橋に行き

御祖師の筆は波に浮き (同上)

△月に村雲、花に風

雪に辛くも、母見兼ね (常磐御前)

△ざつと障子を推し開く

悪狐兩士の野路に狩り (玉藻前、殺生石)

△花に清香、月に影

謀り佞賊、牛に化け (鬼童丸)

△桔梗、かるかや、女郎花

異形なる業、鬼に化し (茨城童子)

△桔梗、かるかや、女郎花

氣丈なる業、鬼退治 (惟茂)

△歌に詠み、詩に作り

馬に乗り、二騎進み (佐々木、宇治川先陣)

△假名手本忠臣藏

花手折り勇戦武者 (梶原源太景季)

△どうぞぞ叶へし暮の鐘

弘法、川邊で筆を投げ (弘法大師)

△時刻やうく辰も過ぎ

奇特妙法龍の口 (日蓮上人御難)

△こつちへおこしと政岡が



頓智でおどしの旗の山（むしろ旗計略）

△打物わざにてかなふまじ

蕙の旗にて謀る才（同上）

△氷の及雪の膚

謀士の才は、むしろのはた（同上）

△どうした罪か、なさけない

謀士が不意に旗で勝ち（同上）

△都立ち西のうみ

ひさご増し智士の武威（同上）

△今ぞ浮世をはなれ坂

智者も、むしろの、なたればた（同上）

△またく間に人の山

たばかる不意に智慧の旗（同上）

△思ひは山のかせぎにて

威しは旗を掲げし智慧（同上）

△身延の山の風の音

忍ぶも雨夜、かさの音（日吉丸）

△さゝをかたげて千鳥足

かさを、かぶせて忍び足（同上）

△好み給へる花の道

氷さゝげる朝の式（加州家氷献上）

△急ぎ候ふ程に



智慮ちりよに強盜威嚇がうたうおどし（加藤虎之助かとうとらのすけ）

△實じつにありがたき法の道のりみち

△千際せんざいに早はやき鳥とりを射いし（柴田勝家しばたかついえ）

△一まと間の障子しょうじ推おしひらき

△一まと矢やの妙めうに落おちし鴈かり（養由基やういうき）

△ソツとばかりに取とり亂みだす

△啼なくも矢や先さきにおとす猿さる（同上どうじやう）

△涙なみだといめて立たち上あがり

△矢やには恐おそれて猿さる啼なき（同上どうじやう）

△暇いとま申まをして出いづるなり

△一まと矢やとほして射いつる鴈かり（同上どうじやう）

△雀すずめや犬いぬに劣おとつたる

△直すぐに矢や射いるに恐おそる猿さる（同上どうじやう）

△切きり攘はらうたる尼あまが崎さき

△義士ぎしが放埒はうらつ、刀かたな錆び（忠臣藏七段目ちゆうしんぐらだんめ）

△其その外ほか四方よもの山やま々に

△所存しよぞんは智謀ちぼうの刀かたな錆び（同上どうじやう）

△人ひとの心こころのおくふかき

△木戸きどの外と面らの送おくる矢やに（近江源氏あふみげんじ）

△おんごのなはく

△貪慾どんよくな老婆はら（おちよ、半兵衛はんべゑの老婆はら）

△浅瀬あさせを渡わたる此この佐々木ささき



あはれを語る子のかたみ (仲麿)

△さしもの剛氣もかばと爲り

班女の狂氣も筐を持ち (班女狂亂)

△消ゆるばかりの思ひなり

いづれ矢先も鎧さし (八幡太郎義家)

△おもひを述ぶるばかりなり

鎧も剛の矢先たち (同上)

△あはれ昔の戀ひしきは

川邊二人の鳥射し矢 (生田川水鳥)

△今度の早うちに

門戸の七不思議 (越後)

△男まさりの政岡が

心やさしの花の若 (金澤)

△今のそぶりでちがひない

光を強氣で抱きあげ (水口の大井)

△思ひ遣つて只一と目

氷張つて渡り初め (諏訪湖上の渡り初め)

△途方に暮れし折柄に

御所の古例の鬼やらひ (節分、雛の儀式)

△いざりの足の遙々と

勇みの魚の初がつを (初がつを)

△心をみかく種子と爲り



養老希なる酒の味（小佐治）

△ありがたし／＼

波あらし鳴きわたり

△思案の扇からりと捨て

危難の皇子さらしの船

△さつた／＼と言ひはなし

咲く勝田の藤ながき

△花に清香、月に影

長き名所、藤枝垂れ

△思ひ／＼の鎌倉入り

鎧のぼりを飾つた式

△恥かしがるを無理やりに

あづまに鯉魚賣り走り（初がつを）

△不思議なるかや、妙なるかな

富士見たるかな、晴れたるかな

△ト、ロ／＼と踏みならし

子供おぼこのふり優し

△飢ゑに疲れて死なんいのち

杖に撃たれて危難凌ぎ

△今日満参にて候ふほどに

トンチキ、カン／＼にて僧俗踊り

△まよなき事も身にかゝる



假名書き子供日々習ふ

△たつきも知らぬ山中に

霞も白む花盛り

△こよひぞ秋の最中なる

園にも萩と尾花咲く

△薄衣猶も引かづき

鶯、宿の樹になづき

△つくせし心は水の泡

祝せし九日菊の花

△松はもとより常磐にて

張るは去歳より檐間の注連

△人間にては、よもあらし

新年注連は去冬張らし

△氷の刃、雪の膚

雑煮を焚いて無事の朝

△ことわり過ぎて道理なり

屠蘇飲み無事で雑煮食ひ

△思ふばかりのこゝろなり

揃ふ家内も屠蘇を賀し

△かたぐ同意いさましき

今朝がた雑煮焚きました

△母も一緒に死出のたび



竈吉兆に注連を張り

△光やはらぐ面のみ

勇み舞はさす獅子のふり

△下に引き敷く剛氣の本藏

祝ひ式する雑煮も今朝

△只今おもひたち

家内は小餅賀し

△わたしも御供いたします

家並みも屠蘇をいはひます

△残念な事はかりにて

改年門の飾り注連

△イカニ誰れかある

いはひたてまつる

△たつた一言聞かせてたべ

松は日の本、祝ひで建て

△此の世にては遇ひがたし

小餅入れた粥ぞかし

△さらばとばかり、わかれ行く

たからを飾り並べ知る

△一富士、二鷹、三茄子

雪降りの中なづな摘み

△ノウ祖母様なさけない



十日は、たから並べ出し

△凝つては思案に能はず

野梅が彼岸に花咲く

△佐野のわたりの雪の暮

窓の邊の月の梅

△返答なみだ目も濡み

辨當出した景の包み

△實にこれも旅の宿

飯盛りし華美の籠

△踏み込むほどの不敵もの

月漏る園に梅みごと

△末遙々の都路を

梅咲く春の芝の庵

△不思議なるかや、妙なるかな

藤ひらく棚、垂れたる花

△光かゞやく月の夜に

枝垂花咲く藤の好き

△光かゞやく月の夜に

宮に名高く藤の土地

△忠義の武士のわなにかゝり

賞美の藤の棚に下がり

△浅瀬をわたる此の佐々木



ながめも優る夜の花見

△さす臂には悪魔を攘ひ

春先咲いた櫻の花見

△母の皐月が七顛八倒

花の咲く地は神前發行

△中にも此の松は

花見も夜のさくら

△心のこりのなきやうに

桃のほとりの貸し床几

△ひとりねならば、辛かりし

汐干で濱は砂さがし

△瀬田の長橋打ちわたり

枝に花咲き藤からみ

△またく間に人の山

花咲く躑躅白と赤

△力彌に代つて此の母が

立派に飾つて米俵

△本藏どの、白髪首

本朝桃の雛まつり

△力彌に代つて此の母が

にぎはひ川船夜もあまた

△ハラリくと投げ散らす



川に花火を揚げる夏

△さらば今降る雪も

晴れ間庭澄む月夜

△袖ちる雪を打ち攘ひ

野邊さす月の澄みわたり

△又も背後の山手より

原も月の夜ながめ好き

△忠義の武士のわなにかゝり

すゝきの月も原に優り

△今ぞ浮世をはなれざか

須磨ぞ月夜を眺め和歌

△怨みなければ目を見ひらき

須磨に冴えては景も一倍

△またゝく内に人の山

名たゝる月見鳩の濱

△不思議なるかや妙なるかな

月見なる嗟峨、冴えたる川

△討死は、かねての覺悟

月見には嘉例の團子

△鎧の袖に振りかゝる

今宵と譽めし月ながむ

△深き心もわたつみの



須磨に朧の雅な月夜

△未だ祝言のさかづきを

嗟峨風景の雅な月夜

△あはれを他所に眞柴久吉

ながめも殊に秋は十六夜

△打物わざにて叶ふまじ

月の夜ならびて通ふ雁

△涙といてめて立ちあがり

波間を越えて雁わたり

△さしも思ひし播磨瀧

蘆の邊に雁あまた

△今をはじめの旅ごろも

琵琶湖蘆邊の雁の友

△女房づれの刃にかゝり

朝暮群れの雁啼きわたり

△なさけなしと惜みしに

川邊秋のもみぢ散り

△夫婦の衆へ孝行つくし

秋風の時雨もみぢうつし

△切りはらうたる尼が崎

木に赤う垂る愛宕柿

△涙ながらに政岡が



柿は名高き愛宕山

△打ち落されて力なく

月の夜冴えて鹿が啼く

△見たいばかりに惜しからぬ

慕ひ山路に男鹿啼く

△三輪が崎なる

鹿は秋なり

△何さくと苦笑ひ

秋は谷間に鹿が啼き

△ばいはい心のせつなさ

山は紅葉照る高雄

△涙ながらに政岡が

秋は名高き高雄山

△あじな詞の引はなし

秋は樹間の木々赤み

△實にありがたき法の道

照り葉に赤き森の木々

△川なみをへて、たちまちに

山谷染めて秋の木々

△中央執つて打かつぎ

蜻蛉は飛んで釣りあるき

△一富士、二鷹、三茄子



道筋みなが蜻蛉釣り

△松風寒く夜もすがら

蜻蛉で遊ぶ子の素肌

△いのちばかりを逃るゝもあり

亥の日家並も炬燵を開け

△月には行くも暗からず

雪見は冬の鬱晴らす

△剣の下に手を合はせ

吹雪の庭に景を眺め

△かまにうつして風爐の炭

川に移して雨後の月

△ハヤ反物くれよかし

雅な庵室の梅ひらき

△手負は今ぞ致死期時

子の日は祝ふ君も野路

△書きしたゝめて括り附け

滴した蔭へ涼み船

△さすが童子の嬉しさに

夏は川邊の舟しげき

△うつり易るは世のならひ

涼み眞夏は夜の火花

△月に村雲、花に風



涼み深す夜、花火揚げ

△長柄の銚子、蝶花形

ながめも陽氣、夜の川端

△かゝれば直ぐにまゝになる

川邊は涼み花火揚げ

△味方につけう、はかりごと

見わたす九軒、花みごと

△浅き内匠の鹽谷どの

永き春日の宴は園

△たつきも知らぬ山中に

杜鵑花も開く花やさし

△中を流るゝよしの川

傘をならぶる野路の畑

△味方を取らうばかりなり

日傘もそろふばかりなり

△東南に風立つて

草庵に妙な梅

△この程から歌うた唄

木の本からつたうた鳶

△聞く間おそしと、まろび出で

菊は床にぞ籠にいけ

△立ぎゝ、なみだまろび出で



萩菊掛けた籠にいけ

△八朔の嘉儀

まんさくを刈り

△春の日ながき庵かな

垂る穂に案山子簀に笠

△消ゆるばかりの思ひなり

實入る田並を穂の枝垂り

△館をさして歸らるゝ

牽牛花、垣へまいたつる

△トロくくと踏みならし

夜毎外面の蟲が鳴き

△ハツと驚き口に手を當て

庵の外面に蟲の音も冴え

△正木のかづら長さ夜の

眞萩の三番盛り野面

△刃の中に人と爲り

咲いたも優しき庵の萩

△四海、浪しづかにて

數多萩散る垣根

△差上げられた此の御膳

萩咲き垂れた園の宴

△せうことなしの山科に



外面ぞ萩の花枝垂り

△打ち寄りかたへの草井戸より

月夜にながめも武藏野よき

△唯呆然たるばかりなり

田は豊年なる赤み増し

△アハヤと見ゆる間もなく

山田も枝垂る秋田の作

△唯今思ひ立ち

田並は穂の枝垂り

△しぼり兼ねたるばかりなり

みのり垂れたる田並秋

△こらへて給と右左

穂が出て田毎、日々に垂り

△ことば打ち消す

樹間月照る

△自身に切腹するならば

式事に雪中、積む若葉

△さす臂には悪魔を攘ひ

七日に、雁太なづなを、はやし

△おんみの爲に、おくならば

紋日の嘉例買ふ財寶

△八朔の嘉儀



初春を賀し

△道の武智も仰天なし

春日の嘉例も能う獻じ

△思ひわづらひ過ぎて行く

野面に春先堇花摘む

△なぶり殺しに千松が

直路も野路に田樂や

△よくくそれも力なく

遠近野邊を日傘さし

△花の妙なる法の庭

飯も焚いたる女子の雛

△わたしも御供いたします

家並も桃を雛に賀す

△もみぢも青き稻荷山

女子にぞ遊び雛に飯

△さゝをかたげて千鳥足

鎌をかたげて汐干狩

△評判名題の栗の餅

とうさんやさしのまゝごとし

△さかしき人のはかりごと

さかりし千本花見事

△久しき世々の神かぐら



開きし四方の谷ざくら

△正木のかづら長き世の

山路のさくら花見ごと

△三輪が崎なる佐野のわたり

日傘さしたる花のさかり

△思案の扇ガラリと捨て

勇むも陽氣、かゝりの舟

△組まんとすれば切りはらふ

遊山の母は日々通ふ

△粟の餅屋が、しのび足

海女の檐間は千鳥鳴き

△障子のこらすバタぐぐ

小兒おどかす馬鹿馬鹿馬鹿

△しぼり兼ねたるばかりなり

神輿觸れたる山路秋

△笑へば他から又一人

あばれた山から荒神輿

△かゝれば直ぐにまゝになる

山邊は躑躅、花ひらく

△かゝれば直ぐにまゝになる

川邊は鵜船かゝりたく

△おのが姿を其のまゝに



夜の間、鵜狩の友篝火

△浅瀬をわたる此の佐々木

川邊もあかく夜のかかり

△目深に着たる帽子の内

遙に見たる遠見の富士

△及の中に人と爲り

谷間をからみ木曾の橋

△されば心の師とは爲り

竹は後生の師のかたみ

△月に村雲、花に風

釣魚に深す夜、わな仕掛

△アノ母様の胴慾な

名も高砂の尉と媼

△安土に築く金城に

夏季に来つる金魚賣

△さかしき人のはかりごと

飾りし婦女の傘みごと

△中を流るゝよしの川

花をながめる雪の朝

△月住吉の神あそび

雪降り野路の鷺は飛び

△名にしおふ難波津に



鷺白う田にあそび

△今をはじめの旅衣

鹿の鳴く音も秋のころ

△光かゝやく月の夜に

次第かさなる雪ごもり

△しぼりかねたるばかりなり

千鳥なれたる濱に鳴き

△又も二人あるものか

濱の千鳥鳴く夜の間

△たゞみかさねて打つ太刀に

肩にかたげて賣るさしみ

△もみぢも青き稻荷山

沖にも通ふ漁り蟹

△先だつ不孝は許してたべ

生りたる葡萄は熟して食べ

△沈み果てにし阿迦のくるしみ

水に影見し川ぞ涼しき

△山もかすみて浦の春

畑をかせぎて村の作

△松は、もとより常磐にて

夏は夜毎に麥湯店

△うつくしき玉、箒を持ち



涼む地に座は床几を置き

△こゝろのこりのないやうに

子供踊りの足拍子

△一富士、二鷹、三茄子

市中に、にはか、夏祭

△花にあらしは浮世のならひ

川路明きは氏子の篝火

△サツと障子を推し開く

夏も床几を檐に出す

△三度頂戴仕り

端午上座に武者祭

△トロ／＼と踏みならし

床も子供の武者祭

△薄衣猶も引きかづき

武具櫃和子の式賀する

△まさなきことも身にかゝる

旗立ち鉾を並に飾る

△鎧の袖に振りかゝる

床にも嘉例武器飾る

△瀧のひゞきも、しづかなる

太刀も儀式の五日賀す

△心を磨く種子となり



子供の試合ふ晴の太刀

△知らぬことゝは言ひながら

試合ふ子供等老爺が傍

△互に願ありさうな

山路に照らす秋の月

△思ふばかりの心なり

點す光明の淀の橋

△千代をかさねし常磐の松

仕丁さらひし落葉の松

△女房づれの刃にかゝり

弘法、筆の波間にわかち

△目深に着たる帽子のうち

猿啼き亂す剛士の弓

△その外香具をひつしとたて

子供が勝負を必死の晴

△鎧の袖に振りかゝる

おどしと野邊に弓矢張る



地口づくし

△圓い玉子も切りよで四角

不味い雪花菜も煎りよで旨く

赤い頭部も威勢で光る

悪い女子も衣服で支度

軽いお尻も賣りよでお金

孫も息子も能く似て吝嗇く

盃、茶釜に、きりだめ、柄杓

賈ひ珠でも器用で鬻ぐ

悪い継子もしようで四角



圓い金子もむかしは四角

圓い顔でも怒れば四角

堅い舌も時世で開く

△おまへばかりが出世して

お髯ばかり掃除して

お金錢サツパリ拂底で

お粥ばかり啜らせて

名義ばかり出家して

負債ばかり殖えて来て

外觀ばかり辛抱して

構ばかり嚴然として

虚榮ばかりあこがれて

△釋迦に説法

車夫にケツト

馬車に別當

書家に筆法

師家に月俸

馬鹿に鐵砲

皿に七寶

自暴自棄に滅法

自暴自棄に亂暴

酒に亂暴



△虚言から出たまこと

地租から出た不平

白から出た團子

裾から出た真綿

他所から来た迷子

裾から出た踵

嫁から来た継子

獨活、鱈、烏賊、うまに

裾から上げた舞子

賣るから得た利益

糟から出た眞物

△比翼連理の契

家屋ペンキの光

至極便利の住家

美食珍味の馳走

至極便利のたより

違約延期の不義理

飛脚千里のたより

獨り權利を募り

急ぐ臨時の仕切り

被告延期をねだり

效能く餘吏と契り



至極道理の望

地獄暫時の契

地獄巡吏のかゝり

縦妓格子に縋り

ひがみ、りんきのつり

△回向せうとて御姿を

猫を背負ふとてお背中を

馳走せうとてお肴を

化粧せうとて奥方を

榮耀せうとて御手當を

阿呆せうとて小悴を

△佛の顔も三度

御酒の爛もチャンと

畑の南瓜も澤山

本家の株も安堵

畑の粟も三斗

鼻毛の數もチャンと

△三人寄れば文珠の智慧

堪忍すれば凡夫も智慧

三人酔へば文句の聲

參詣すれば木魚の聲

懺悔をすれば悔悟の聲



三年讀めば愚鈍も智惠

三年讀めば文字も知れ

參禪すれば膽力も練れ

△美人天上より墜つ

美髯電信より墜つ

微塵天井より墜つ

利金勘定より満つ

議員收賄より墜つ

不見轉、拘引より墜つ

△じたい、我れ等は都の生れ

甲「如何だ、君、雜煮を食はんか？」

乙「イヤ、僕は阿部川にしよう」

甲「ナゼ雜煮を食はんのだ？」

乙「食はん理由でもないが、阿部川を食はんと、豆粉に不平を言はれるからさ」

甲「ナゼ？」

乙「それは他でもないが、

じたい阿部川、豆粉の怨み

といふ事があるからさ」

△銚子の濱で鰯が取れる



○「オイ、何を馬鹿をするのだ、寶珠の玉ばかり幾個もく集めたつて、其の中に肝腎のエムが這入つて居なくつては何にもならないではないか」

△「ところが、斯うして置くと、エムが自然出来るのだから妙さ」

○「如何して？」

△「だって昔から言ふ通り

寶珠の玉で金錢が取れる

だわな」

△「さなきだに重さが上の小夜衣

○「ヤアーツ！大變大きな狸を生擒つたな、四足を縛つて、猿轡

を嵌めて、此奴ア動くことも、啼くことも出来ないから至極妙だ。しかし車へでも載せれば可いに、左様して背負つて歩いては重くつてせうがなからう？」

△「ナニサ、重い方が可いのだ」

○「ナゼ？」

△「是れが真個の

狸だに重さが上に猿轡

といふのだ」

△「餘り、つれない胴慾な

○「君、ナンボ僕が饗饗家だつて、是れで、丁度秋刀魚が十一匹



目だせ、もう食へない、澤山だ』

△「イ、ヤ、それはいかん、君過般も天井を七つ食ふと言つたぢやないか、天井の七つ食へるものが、秋刀魚の十五匹や、二十匹食へない筈がない』

いくら天井を七つ食つたからつて、秋刀魚を左様食へといふのは酷だ。

秋刀魚に食へねえ、胴慾な

と言ひたくならぬ』

△トウカミ、エミタメ

主人「是れさ長松、その茶紙を何處へ持つて行く?』

長松「へエ、塵埃箱へ打つ棄つて参ります』

主人「勿體ない事をするものではない、紙屑籠へ入れなさい』

長松「デモ旦那

茶な紙塵埃箱

といふではございませんか』

△鶴龜松竹

○「オヤ、いつも禮を金錢で寄越すのに、今度に限つて鱒と鮭を寄越したのは如何言ふ理由だらう?』

△「それは或然貴所をお祝ひ申したのでございませう。

來る金錢、鱒鮭



と言ひますから——』

△勘定合つて金銭足らず

○「もう此の基は打てない」

△「左様さ、打つ場所が悉皆なくなつたからねえ」

○「是れが眞個の

盤中打つて地が足らず

といふのだ』

△僧正遍昭・天津風

○「残り物で甚だ失敬ですが、御口汚しに情願召食つて下さいま

し』

△「ヤアツ！是れは金婚正宗を……ドウモ恐れ入りましたなあ」

○「イエ、只た一纏貰つた内を、清正公様の御神酒を取りまして、

その跡を……ハツ／＼ハツ、下戸といふ奴は實に意氣地の

ないもので……ですから貴所に飲んで戴くのです。是れが

眞個の

少々献上、餘す酒

と申すもので——』



百人一首かへうた

○下句かへうた

△めぐりあひて見しやそれともわかぬ間に

口尖らせて金の催促

△月見れば千々に物こそ悲しけれ

高い利息の勘定をして

△寂しさに宿を立ち出でながむれば

鍋やきうどん犬の遠吠

△あらざらん此の世の外おもひの思ひ出でに

富士の山ほど金が積みたい



△さびしさに宿を立ち出でながむれば

うらやましくも猫と合乗

△山里は冬ぞさびしさ優りける

枯木の雪に鳥二三羽

△難波がた短き蘆の節の間も

待たれませんか金の催促

△契りきなかたみの袖をしばりつゝ

そら泣きをして欺す高等

△ながらへば未だこのごろやしのばれん

猫と見し世ぞ今は戀しき

△朝ぼらけ有明の月と見るまでに

イルミネーション 點けた高樓

△朝ぼらけ有明の月と見るまでに

白いペンキを塗つた洋館

△山里は冬ぞさびしさ優りける

暴風雨が濟めば跡は鹿鳴く

△人も惜し人も怨めし味氣なく

不貞腐れなる輕薄女の逃亡

△これや此の行くも歸るもわかれては

知れずまごつく辻の迷ひ子

△難波がた短き蘆の節の間も

待たれぬものと汽車に乗る晩



△めぐりあひて見しやそれともわかぬ間に

逃げて行くなり借金のある人

△大江山生野の道は遠けれど

お安く行くと車夫は言ふなり

△あらざらん此の世の外の思ひ出に

百萬圓を持つて見たさま

△これや此の行くも歸るもわかれては

尻食ひなる今の世の中

△夏の夜は未だ宵ながら明けぬるを

縁に寝轉び小説を讀む

△夏の夜は未だ宵ながら明けぬるを

酷い人だと女生泣く

△人はいざ心も知らず故郷は

老爺は木を刈り老婆は洗濯

△人はいざ心も知らず故郷は

今日は草刈り明日は種蒔き

△高砂の尾上の櫻咲きにけり

明日は如何だと誘ふ連中

△逢ふ事の絶えてしなくば中々に

無沙汰をしても怨まれもせず

○上句かへうた



△汁粉餅のこして置けば堅くなる

あまりてなどか人の戀しき

△くらやみで柱にあたまたゞさつけ

人をも身をも怨みざらまし

△ひよろついで尻餅舂いた置炬燵

くだけて物をおもふころかな

△風引いた人の袂の鼻紙は

人こそ知らね乾く間もなし

△値の安き蝙蝠傘を雨にさせば

わが衣手はつゆにぬれつゝ

△冷ゆる夜の假着の蒲團今すてゝ

長くもがなとおもひけるかな

△消えた火を吹いて煙を目に入れて

かこち顔なるわが涙かな

△瀬戸物屋をさうガラ／＼皿小鉢

くだけて物を思ふ頃かな

△掃除するランプを落としホヤ共に

くだけて物を思ふ頃かな

△下女をさう棚の井取り落し

くだけて物を思ふ頃かな

△迷ひ子を巡查さんが持て餘し

人に知られて来るよしもがな



△樂みにして待つ二度の藪入りは

いかに久しき物とかは知る

△下戸の自暴自棄飲んだ煎茶に浮かされて

長々し夜をひとりかもねん

△廢されし冗員淘汰の免の字は

我が身一つの秋にはあらねど

△大黒に逃げて行かれて和尚さん

ころもかたしきひとりかもねん

△ジャム馬に跳び込まれたる玻璃屋は

くだけて物をおもふころかな

△道樂息子親父のあたま見るにつけ

はげしかれ(叱れ)とは祈らぬものを

△好いた同士手に手を取りてかけおちの

ゆくへも知らぬ戀のみちかな

△一合の酒飲みながら腕を引き

長くもがなとおもひけるかな

△銘酒屋を安いあそびと思ふより

しづ心なく花(鼻)の散るらん

△門閥の高き調子は族名の

華より外に知る人もなし

△わさび酢それとも知らずアグリ喰ひ

かこち顔なるわが涙かな



△洗濯の糊の硬いもいやなれど

曉あかつき（垢附あかづき）ばかり憂うれきものはなし

△植木屋が知らぬ他國へ出掛ければ

花より外ほかに知る人もなし

△ますらをが思ふ心のくひちがひ

身のいたづらになりぬべきかな

△一と資本さて方向とおもふ間に

あはれ今年の秋も去ぬめり

△酔ひざめに妻が出す湯のさくら漬

花ぞむかしの香かにはほひける

○上下兩句かへうた

△車夫朝起きるからハイ／＼は

ハイに朽ちなん名こそ惜しけれ

△姑の片偏屈に逢ふ嫁は

困りてなどが實家の戀しき

△一滴とさゝれて下戸の搔く頭部

さかづきばかり憂きものはなし

△大神樂もはや終の一曲は

むすめの姿しばしといめん

△紙入のあきつる方をながむれば

只勘定の附けぞのこれる



△風俗も今の時節に比ぶれば

むかしは物を奢らざりけり

△飲み過ぎて寝たので又も爲そこなひ

衣干しつゝあたまかく山

△顔の色はうつりにけりな寫眞の繪

我が身ながらも長い鼻の毛

△顔の色はうつりにけりな寫眞の繪

我が身ながらも耻かしきかな

△腹を痛め辛と産んだる那のむすめ

人に取られて耐るものかは

### 滑稽問答

△只ツた一枚でも千餅(煎餅)といふは如何

只ツた一箇でも萬頭(饅頭)といふが如し

△四方なるものを三方といふは如何

角があつても角取(炭取)といふが如し

△朝着ても夕方(浴衣)といふは如何

振袖でも小袖といふが如し

△赤い花をば青い(葵)といふは如何

見るものだのに聞く(菊)といふが如し

△只ツた一人を千人(仙人)といふは如何



一人でも十人（住人）といふが如し

△一つでもお八（飯櫃）といふは如何

一つの家屋でも八百屋といふが如し

△二羽の鳥をば二羽鳥といふは如何

見て捕つても不見捕（水禽）といふが如し

△雨の降らぬに雨利加（亞米利加）といふは如何

降つて居る時でも降らんす（佛蘭西）といふが如し

△居もせぬのに居たりい（伊太利）といふは如何

己が所有でもないのに乃公んだ（和蘭）といふが如し

△天空に居りもせぬのに雲（蜘蛛）といふは如何

植物をば人參といふが如し

△悪事をしもせぬに徒刑（時計）といふは如何

兵士に居らぬに千騎（疝氣）といふが如し

△大きな御宮がありながら無い宮（内宮）といふは如何

一箇の宮でも八萬宮（八幡宮）といふが如し

△雨具もないのに簑（美濃）といふは如何

船の具もないのに櫂（甲斐）といふが如し

△一人居ても四族（士族）といふは如何

一人の盜賊でも三族（山賊）といふが如し

△珍らしくもないに珍（狎）といふは如何

起きて居る時でも寢子（猫）といふが如し

△眞物を執らへて贗（雁）といふは如何



一羽居ても四十雀といふが如し

△老人を若い者といふは如何

妙齡の美人を御中老といふが如し

△中程を通つても端(橋)といふは如何

丸くもない事を四丸(締る)といふが如し

△一つでも八(蜂)といふは如何

今居なくても有り(蟻)といふが如し

△待つても居らぬに待つ(松)といふは如何

過ぎても居らぬに過ぎ(杉)といふが如し

△一軒の商家を七屋(質屋)といふは如何

一つの店を四店(支店)といふが如し

△眞直に置いても逆樽(酒樽)といふは如何

他國に居ても越前といふが如し

△一つの品をば二(荷)といふは如何

一人生まれても三(産)といふが如し

△一度打つても五(碁)といふは如何

一句作つても四(詩)といふが如し

△升物でもないのに五合(言語)といふは如何

量りもせぬのに二合(苺)といふが如し

△若い者をば萬歳といふは如何

一人でも質置く(七億)老婆といふがごとし

△一度しても三用(算用)といふは如何



一つの用でも四用（私用）といふが如し

△一人でも五妻（後妻）といふは如何

一人居ても三婆（産婆）といふが如し

△手渡して遣る物を落し玉（御年玉）といふは如何

物を遺失しても拾ひ歩行といふが如し

△一箇の島を千島といふは如何

一箇の國を六つ（陸奥）といふが如し

△堅くもないのに石（醫師）といふは如何

柔かくもないのにやはら（柔術）といふが如し

△遠くに在つても傍（蕎麥）といふは如何

近所に在つても遠く（豆腐）といふが如し

△五尺の體軀でありながら六尺といふは如何

わづか體軀の内うちに在るものを四里（尻）といふが如し

△白髪三千丈は頗る長過ぎるやうだが如何

鬢四間（関子齋）には相應なるべし

△女子の臀部は如何して重いのか

四里（尻）といふから重いのも無理はないであらう。

△細君の事をワイフといふのは何故か？

鼻薬を遣らないと、直ちきにすねて困こまらせるから賄府わいふといふの

事

△處女の事をメイドといふのは何故か？

氣きが狭せまくて、兎ともすれば『南無阿彌陀佛』を極きめ込こみこから冥土めいど



といふのさ

△小さな魚を五里(鮓)といふは如何

小さな果物を九里(栗)といふが如し

△一人居ても五住(後住)といふは如何

一人住んでも十住(先住)といふが如し

△他人の爲に達引くことを肌を脱ぐといふのは何故か

大きな腹を見せる爲さ

△有名なる航海者をナゼ、ナンセンといふか

名醫でありながらへボンといふが如し

△收賄事件が持ち上がる、如何してゴタ／＼するの

臭聞(醜聞)と糞議(紛議)とは附き物だからさ

△今と昔とは如何異ふか

それは、マア斯うさ

今ならば、紀文電車を一手でし

今ならば、伯夷輸入の麴麩を喰ひ

今ならば、蘆生は夢に馬車に乗り

今ならば、杉本寄席へ出るだらう

今ならば、八汐、モルヒ子買ひ求め

今ならば、錢屋各國へ店を出し

今ならば、曾我兄弟は、インヴァを着

今ならば、義士拳銃を腰にさし



今ならば、義士出立に牛肉屋

今ならば、小町寫真に撮つて賣り

今ならば、公曉六連發で撃ち

今ならば、宗吾不服で大審院

今ならば、蘇秦演說會に出で

今ならば、お七懲役で濟むところ

今ならば、インキを流す錦祥女

今ならば、藤吉郎は靴をふき

今ならば、茂林寺釜を出品し

今ならば、宗吾、規則を法を立て

今ならば、千早の城へ臭氣止め

今ならば、博覽會へ玉手箱

今ならば、張良屹度狙撃銃

今ならば、巨勢の金岡、油畫師

今ならば、苜萱、妻に見附けられ

今ならば、お七、分署へ自首を爲し

今ならば、鯉華族と吉良は言ひ

今ならば、勝頼の像寫真なり

今ならば、八重垣シヤツポを擔ぎ出し

今ならば、大師、横文字書くところ

今ならば、政岡、麵麩を買つて置き

今ならば、頼政、拳銃でぬえを撃ち



今ならば、千崎マツチ出して遣り  
 今ならば、大砲で撃つ大江山  
 今ならば、布袋は擔ぐ大靴  
 今ならば、平次、巡查の御厄介  
 今ならば、およね、仁丹あるところ  
 今ならば、彦左衛門は違警罪  
 今ならば、清正、髭を八字にし  
 今ならば、頼兼、靴で廊通ひ  
 今ならば、班女、瘋癲病院入り  
 今ならば、五條の橋で攫み合ひ  
 今ならば、浦島八千何箇月

今ならば、俊寛長い土擔ぎ  
 今ならば、孟母、私塾を創立し  
 今ならば、鱧七、ビーヤ飲むところ  
 今ならば、源藏、文部省の干渉受け  
 今ならば、良雄、喇叭を吹くところ  
 今ならば、早野、八字の髭を附け  
 今ならば、高野、賄賂のしらべ受け  
 今ならば、仁木、降神術つかひ

○似た物くらべ

開拔けに、麻拔け  
 ぼんやりに、無理遣り



胸三寸に、舌三寸 口車に、火の車

無理算段に、遣り繰り算段

厚かましうに、親かましう

向ふ水に、後ろ水 馬鹿下駄に、トボ下駄

しわん坊に、けちん坊 かなはんには、かまはん

額に寄る皺に、眉でつくる皺

脚の三里に、口八町 間夫に、車夫

ハイカラに、蠻カラ 自他落に、墮落

無鐵砲に、當てズツ砲

體軀五尺に、鼻下三尺

見たツ切りに、是れツ切り

氣障氣に、徽氣 鼻下長に、八百長

電信に、田紳 向ッ腹に、土手ッ腹

海老茶式部に、高等内侍

△にほひの土藏……香ぐら (神樂)

△今日は朔日、明日晦日……逆月 (盃)

△大黒さまの放屁……ふくぶ (瓢)

△四十二の往生……厄死 (薬師)

△亡者のみやげ……死ぐれ (時雨)

△一字千金……師恩 (紫苑)

△石婦の願望……子待ち (小町)



- △十九の美人の肌……十九身(鼓)
- △人の羨む居どころ……住み好し(住吉)
- △前は目明き、後ろは盲人……見見ず(蚯蚓)
- △二十人が木のぼりをする……茶
- △土蔵の中の妖怪……くら魔(鞍馬)
- △めくらの妖怪……見ず来る魔(水車)
- △老年の客が見えぬ……老待つ(老松)
- △破れた蚊帳……蚊入る(蛙)
- △二人のはだか……着ぬく(ぎぬく)
- △同行の道草……伴長(とも長)
- △海の道、十里に足らず……濱九里(文蛤)

- △山人の物おもひ……賤苦(雫)
- △いくさの中のかをり……陣香(沈香)
- △古天狗……古魔(獨樂)
- △田舎の人の言詞……方言(鉛)
- △圓きもの……隅取り(炭取り)
- △譬は狸、老婆は死んだり……かき(柿)
- △女子の魂なくなりけり……鏡の終(加賀、美濃、尾張)
- △魚取る鳥のうすのろき……鵜鈍(鰓鈍)
- △何故酔つた……強ひたけ(椎茸)
- △女房自慢で店へ置く……妻見な(つまみ菜)
- △狐と猫で皆荒らし……狐猫食ふ(蒟蒻)



△寒いに裸體で咳嗽をせく……はだかの咳嗽(安宅の關)

△夕日影、明日のひよりや空に知る(貝名)……赤西(あかにし)

△舌布子、洗濯もせぬひとりもの(東海道五十三驛の二)……垢

あか(赤坂)

△鐘の音に驚き覺める大花火(出來事の二)……火災

△竹の子を尋ねて歩くお醫者どん(職業)……藪醫者

△鳶が産む鷹といはれる子供達(魚類)……かすの子

### 滑稽夢判斷

或る村人が夢に親戚の宴會へ招かれて、蘿蔔と菜の味噌汁を御馳走になつた、ところが、蘿蔔だけ擇り取つて喫べて、菜をソツクリのこした、目覺めて後、該地の識者に判斷を頼みたるに、識者は確と膝を撃つて、

『イヤ、實に吉夢だ、此様な芽出たい夢はない』

『へエー、如何してですか?』

『ハテ大功(蘿蔔)を執つて名(菜)を遺す前兆です』

職人が子供に三錢の假面を買つて遣つた夢を見た、しかし買った



ばかりで、未だ碌々被りもせぬ内に忽ち鼻が取れたり、口が取れたりして、メチャクに毀れて了つた、目覺めて後、何となく氣になるので判じて貰つたところが、

『芽出たい夢だ。足下は近日素敵に忙しくなつて、澤山の収入があるぜ』

『如何して?』

『イヤサ、廉價假面は即ち休めんといふことだから、…加之に口が取れちやあ息が吐かれん、鼻(纏頭)が取れりやあ囊中が福々になる、休めん、息の吐かれん程忙しくつて、囊中が福々になる、イヤ真に祝すべしだ』

或る財産家が、土藏の中に鹿の臥て居る夢を見た、判じて貰ふと判断者は眉を擡めて、

『ハテさてお氣の毒ですなあ』

『なぜですか?』

と聞くと、

『左様。失敬ながら貴所は近日非常に失敗なさいます』

『如何して?』

『イヤサ、土藏に鹿の臥て居る夢は、藏鹿臥る(生活し兼ねる)といふ前兆です』

驟雨に出遇つたところが、傘のないので、非常に困却した夢を見



た、判じて貰ふと、

『足下さんは、此の大晦日を越すのが餘程困難だ、金策の法が附かんから——』

『如何して貰うすか？』

と聞くと、

『傘がなくツて困つたのは、傘ない(貸さない)といふ前表だ』

○

『ア、好い心持だ、久し振りで通りの好い烟管で烟草が吸めた』  
斯う言ひつゝ快く烟草を吸んで居るところの夢を見た。

『的然吉い夢であらう』

と喜び勇んで判じて貰ふと、案に相違して、『是れは吉い夢ではない』

といひ、

『君は今計畫んで居ることがあるでしようが、その事が旨く行かん前兆だ』

といふ。

『如何して？』

と聞くと、

『烟管の通りの可いのは、詰まらんといふ意で、事の畫餅に屬するところから、ア、詰まらん！ と、屹度嘆聲を漏らすであらう』  
と答へた。

○

或る相場師が外妾と口論をして腹立ち紛れに彼女の股間を蹴た夢



を見た、占夢者は判じて、

『お氣の毒だが、今度も失敗です』

と言つた。

『ナゼ？』

と推し反して問ふと、

『股間蹴る(又負ける)といふ夢だ』

と答へた。

○

(問)猿が戯れに鱈を浚つて行つた夢は？

(答)鱈猿(足らざる)として、物事不足勝の前表なり。

(問)電車、汽車等に乗つたる夢は？

(答)車輪で走れといふ神告なり。

(問)顔へ鞠を投附けられた夢は？

(答)面鞠として舊惡露顯に及び、逮捕せらるゝといふ神告なり。

(問)越中禪を締めた夢は？

(答)尻に帆掛けて逃げろといふ神告なり。

(問)狸の夢は？

(答)狸(短氣は)損氣として、短氣を戒むる神告なり。

(問)犬の夢は？

(答)犬(居ぬ)として、轉宅するか、又は他國へ旅行する前兆なり。



當て物

○狂句の部

(一) 大祭日、旭日の旗何處にも (蟲二つ) …… 蛭、蛙 (翻る)

(二) 日限が追つて來たと大いそぎ (菓物二つ) …… 枇杷、梨

(日はなし)

(三) 外國の二つの名をば二度に讀み (穀物二つ) …… 玉蜀黍

(唐もろこし)

(四) 横にして見れば長さも三百間 (町の名) …… 高砂町 (高)

五町)

(五) 二つ三つ薄き利を見て捌きけり (座敷道具の名) …… 五徳



(六) 焼餅は焼かねば妻の役濟まず (東海道三郡の名) …… 多摩

丹羽、結城 (偶には言ふ氣)

(七) 西洋の傘をば人が字つけ (獸の名) …… 蝙蝠

(八) 貧乏の寺客殿で飯を焚き (菓物二つ) …… 栗、梨 (寺厨なし)

(九) 柴刈りにぢいは緩々跡から出 (東京諸門の一) …… 婆々先

(馬場先)

(一〇) 水鳥の壽は鶴に似て幾千歳 (昔の文士の姓名) …… 鴨の長

命 (長明)

(一一) 寡婦で居てアイスのやうに金を貸し (東京府下の郡名) ……

・ 年增高利 (豊島郡)

(一二) 馬鹿だけに身を反し見て嫉妬する (食物の名) …… 鹿馬焼

(蒲焼)

(一三) 狐をば大釜に入れ串に刺し (食物の名) …… 狐養焼く (蒟

蒟)

(一四) 土佐狩野見極められぬ筆の妙 (源氏名の一つ) …… 繪合

(一五) 普請の圖植込の場所先へ書き (鳥の名) …… 庭取り (雞)

(一六) 音と音人といふ字を二度に讀み (青物の名) …… 人人 (胡

蘿蔔)

(一七) 裝束も上は入らぬと長袴 (百人一首の名) …… 素袍の無い

し (周防内侍)

(一八) 春いたなら杵を逆さと齧い奴 (青物二つの名) …… あさ春

き (胡葱) ねぎ (葱)



(二九) 竹の子を尋ねて細き道を行き (植木の名) …… やぶかうじ

(三〇) 臨月になつても兎角分娩はいや (薬の名) …… 産嫌ひ (山

歸來)

(三一) 酒飲みの座敷へ娘呼びにけり (草花の名) …… をんなめし

(敗醬)

(三二) 甲子に受けた御影に鼻がなし (道具の名) …… 大黒徹毒

(大黒傘)

(三三) 旅の留守やはり膳をばさつと出し (武者の名) …… 影据る

(景季)

(三四) 木曾路では湯に入らざるへもたまのここと (百人一首中の名) ……

山邊垢人 (赤人)

(三五) 板額に良人にました方あり (支那小説の名) …… 妻勇氣

(西遊記)

(三六) 髪結はず風呂へも入らず着ず脱がす (水滸傳勇士の名) ……

武松

(三七) 福助の裔は小さく坐りけり (十二箇月の一つ) …… 鉢勝つ

(八月)

(三八) あの人は漢の高祖を煮て食べる (東京市内の名) …… 龍子

食ふ (兩國)

(三九) 團子も甜瓜も揃ふ魂祭 (日用道具の名) …… 盆

(四〇) 不忍の願ひ成就の禮参 (畫伯の名) …… 叶ふ (狩野)

(四一) ハテ變な今日は朔日明日晦日 (日用道具の名) …… 逆月 (盃)



(三二) 鼻高き學者先生登天し (舊幕時代の學者の名) …… 空居

(徂來)

(三三) 古史通の作者は圍碁も亦上手 (同上) …… 白石

(三四) 十匹を出して感謝の意を表し (蟲の名) …… 有難う (蟻が十)

(三五) 三月づゝ四つ寄せれば十二月 (書籍の名) …… 四季 (史記)

(三六) 玉蟲と與市雙方睨み合ひ (夏物商人) …… 扇、矢 (扇屋)

(三七) 姫糊の善いと悪るいを見分けて居 (武者の名) …… 糊擇り

(範頼)

(三八) お代りと出して四人が氷水 (蟲の名二) …… 蜂蠅 (八杯)

(三九) 馬鹿息子もう是れ迄と勘當し (青物の名) …… 久離 (胡瓜)

(四〇) 六歌仙小野小町は女なり (西鶴著作の名) …… 五人男

(四一) 雨風は烈し山吹ふき取られ (西京名所) …… 嵐山

(四二) 名譽ある下女はかいみも如來なり (青物の名) …… 初、竹

(紫葺)

鏡山のおはつと、お竹大日如來となり。

(四三) 鳩にまめ投げて遣るのもやくめなり (職人の名) …… 蒔餅

師 (蒔繪師)

(四四) 喘息で今朝から喉がゼーくし (數字の一つの名) …… ゼ

ロ (零)

(四五) 勝頼は信玄公の實子なり (勝手道具の名) …… 甲斐嫡子、

(貝杓子)

(四六) さしこみは針醫もいらす全快し (茶道具の名) …… 茶癩



(茶杓)

(四七)十六は獣の名かと下女尋ね (獣類の名)……四々 (獅子)

(四八)竹の子を尋ねて歩くお醫者どん (職業の名)……藪醫者

(四九)五分玉は十五錢かと下女たづね (裝飾品の名)……三五

(珊瑚)

(五〇)品川のかしらは蟲と下女思ひ (官職の名)……蝶々 (町長)

(五一)雪降りに鉄を擔いで藪へ行く (食物の名)……孟宗

(五二)手拭をツイ洗湯へ忘れて來 (二箇所の名)……湯へ置きつ

(油井、興津)

(五三)加賀の次能登ではないて首を振り (衣類の名)……越中

(横鼻種)

(五四)筒井筒かたばみの名は朽ちもせず (橋の名)……左衛門橋

(五五)思はずも飲み過したか千鳥足 (支那の地名)……いかい醉

(威海衛)

(五六)牛頭馬頭と閻魔を見せる地獄の繪 (曾我狂言の役割)……

(鬼王)

(五七)須磨の蒲扇の要中てにけり (青物の名)……那須 (茄子)

(五八)閨暑さしのゝめ迄も酔倒れ (源氏名三つ)……床夏、酒氣、

夢の浮橋 (常夏、榊、夢の浮橋)

(五九)わけながら假名のかしらを書きあつめ (國五つの名)……

(伊賀、伊勢、伊豆、伊豫、伊岐)

(六〇)尙々の副書ばかり假名で書き (寺院の名)……本文字 (本



門寺もんじ

(六一)あけて見て下女手紙をば引つさばき(曆の中段三つ)……  
ひらく、おさん、やぶる。

(六二)常やみは是れ日蝕の皆既なり(蟲の名)……日暗し(ひぐらし)

(六三)龜井戸の花の間に座を構へ(振り附けの名)……藤間勘右

衛門ゑもん

(六四)あの人は投票の數二位を占め(書籍の名)……次點(字典)

(六五)冬の夜や太公望の妻ひとり(橋の名)……吾妻待ち(吾妻橋)

(六六)ドウゾヤと袂に絶る薄命兒(書籍の名)……乞兒(古事記)

(六七)大將はかゝれくと采を振り(蟲の名)……下知下知(蛭)

(六八)角鷹の首からして逆さにし(乾物の名)……葛

みづぐの首、即ちみづを枯らして、無くして了ひ、跡のくづを逆さにすればくづ(くず)となるなり。

(六九)三五九を一つ減らして神へなげ(青物の名)……十六さゝ

げ(十六疋)

三と、五と、九と加ふれば十七になる、その内から一つ減らすゆる十六なり、それを神へなげるゆる、捧げ、即ち疋となるなり。

(七〇)稻妻やいづくの端も作のよさ(刀の銘)……雷、國吉し

(來國芳)

(七一)蛇の皮二十合せて眺めけり(國二つの名)……巳皮、十



見(三河、遠江)

(七二) 緋縮緬裏襟にして懲とし(百人一首の中の名)……赤染衣

紋(赤染衛門)

(七三) 宮參、母は始めて髪をすき(書籍の名)……産後櫛(三國志)

(七四) 良人にはまこと親にはよく事へ(百人一首の中の名)……

貞、信、孝(貞信公)

(七五) 此の里のはづれ狐のかしまし、(染色二つの名)……村先、

ユン(紫、紺)

(七六) 狐めが大きな聲と五月蠅がり(毒物の名)……大こん(蘿蔔)

(七七) 遠道は御苦勞といふ日附なり(年號二つの名)……今日は

遠方(享和、延寶)

(七八) 西東北にも見えぬ雲の峰(植物の名)……南天(南天燭)

(七九) でんがくは裸體になつて膚を見せ(草花の名)……味噌割

ぎ(鼠尾草)

(八〇) 物言はぬ舞踏無錢で見物し(百人一首の中の名)……壬生

の無錢見(壬生忠見)

(八一) 掃除して丁ふところへ子が生まれ(神社の名)……掃く産

(白山)

(八二) 玉子なか卵黄を抜いたら跡は何(蟲二つ)……虱(蛋白)

(八三) 風流な數寄屋構へや四疊半(獸二つ)……鹿、熊(四角間)

(八四) 末までも厭かじ厭かれじ友白髪(力士の名)……高砂

(八五) 卯の方は今年も稻の出來のよき(支那人の名)……東方朔



(東豊作)

(八六) 根引して添ひ遂げて借物おもひ (菓物一つ) …… 古河梨

(子が無し)

(八七) 貧乏の菜はいつでもおなじもの (鳥の名) …… しっふから

(始終雪花菜)

(八八) 涼しさやえぶしも入らず肱枕 (國二つの名) …… 加賀、伊

豆 (蚊が居ず)

(八九) 忠臣の楠氏の墓や湊川 (百人一首の下の句) …… 名こそ流

れて猶きこえける

(九〇) お隣の養子は馬鹿に金を溜め (青物三つ) …… 筍、茗荷、

落 (他家の子、めやうが、富貴)

- (九一) 易占に水雷屯の易を見せ (支那名將の名) …… 韓信 (坎震)
- (九二) 是れ切りで産婆モウ御免 (反物の名) …… 棧留め (産止め)
- (九三) 實業家儲けた上に又まうけ (日用器具の名) …… 徳利
- (九四) 萬歳の太夫はいつか失せにけり (獸二つの名) …… 才三 (犀象) ばかり
- (九五) 歩行くのも負けず戸塚の手前まで (乾物の名) …… 勝栗 (歩行九里)
- (九六) 杖をつく中に苦のある老の旅 (道具一つの名) …… 机
- (九七) 打ち解ける太鼓と鼓、腹と腹 (獸二つの名) …… 馬、狐
- (九八) 草臥れた今日は麓に首陽山 (中仙道二つの名) …… 板橋、

蕨 (痛た足、蕨)



(九九) 夕立や田をみめぐりと其角讀み (賣藥の名) …… 妙振り出

し (妙降り出し)

(一〇〇) 山鳩が鷹に追はれて羽ぬけ鳥 (國の名) …… 大和

○通常あてもの

不具者

(一〇一) 原田甲斐

片眼 (奸智) もある

(一〇二) 葉ざくら

花 (鼻) がない

(一〇三) 難波江

短き蘆 (足) もある

(一〇四) 毒魚

河豚 (不具) だ

○

(一〇五) 天草騒動の起因 (木の名二つ) …… 桐、紫檀 (切支丹)

(一〇六) 女巫の警 (橋の名) …… 女巫食ふ橋 (一石橋)

(一〇七) 令嬢の待合 (鳥の名) …… 雀 (チウく 饒舌る)

(一〇八) 小さな形體をして居ながら、大きなものを使ひ廻はすもの

は何 (蟲一つの名) …… 蠶

(一〇九) 怖らしい眼のやうな名で雨天に必要な物品 …… 蛇の目

(一一〇) 細い嘴で恐るべき作用をするもの (器械の名) …… 鐵砲



(一一一)能く見る癖に、見ないやうな名の必需品……水(不見)

(一一二)捉めさうに見えて、捉めないもの……影法師

(一一三)不味さうに見えて、旨いもの……とろろ汁

(一一四)旨さうに見えて、不味いもの……肝油

(一一五)大きなものが二つあつて、一つは首があり、一つは首がな

い(獸二つの名。但し字探し)……牛と午(馬)

(一一六)恐れ入りましたが、家來へ御飯を御遣はし下さい(武者の

名)……巴御前(供へ御膳)

(一一七)右も左も石塔ばかり(衣類の名)……袴(墓間)

(一一八)赤小豆を煎て居る傍に、薄遅い奴が坐つて居る(道具の名)

行燈(餡鈍)

(一一九)百人の中、九十六人は代人だ(道具の名)……漉團扇、

(四分内輪)

(一二〇)久し振りで逢つたものだから、一晩話しつゞけて到頭徹夜

をして丁つた(染色の名)……あひねず

(一二一)何だか今日は降りさうだ(菓子の名)……時雨

(一二二)那處では、頻りに太鼓の稽古をして居ると、此處では、夢

中になつて鼓の稽古をして居る(身體の二箇處)……

(腹)と、テンく(頭)

(一二三)道樂息子が不圖親の意見を想起して實行する氣になつた

(蟲の名)……蛙(歸る)

(一二四)コンく、ギヤンく(道具の名)……箆筒(痰す)



- (一一二五) 目鼻口 (魚の名) …… 海鰻 (穴五)
- (一一二六) お向ふの坊ちやん (青物の名) …… 筍 (他家の子)
- (一一二七) 麝香 (神佛の名) …… 仁王 (香ふ)
- (一一二八) 砂糖 (美濃國古戦場の名) …… 垂井 (甘い)
- (一二二六) 壯士一たび去つてまた歸らず (獣の名) …… 犬 (去ぬ)
- (一二三〇) 中年美人 (東京の町名) …… 豊島町 (年増長)
- (一二三一) ウンはは、おしいく (花の名) …… 梅 (旨え)
- (一二三二) 晴雨不定 (東京の町名) …… 照降町
- (一二三三) 猪喰つた報 (同上) …… 茸出町
- (一二三四) 洗つたら、黒い男が赤くなつたといふ (古人の名) …… 大伴黒主 (草紙洗ひで赤面)

(一二三五) 虚と真と、徳と不徳と、醜と美とを年中持つて歩いて居る  
 人 …… 郵便配達夫

○和歌 上の句、當てもの

- (一二三六) 松もむかしの友ならなくに (力士の名) …… 高砂
- (一二三七) 春立つ今日の風や解くらん (衣服の中の名) …… 并に天然物の名二つ …… 袖、水、氷
- (一二三八) 晝は消えつゝ物をこそ思へ (源氏名) …… 篝火
- (一二三九) 長々し夜をひとりかも寝ん (鳥の名) …… 山鳥
- (一二四〇) 聲聞く時を秋はかなしき (植物の名) …… 紅葉
- (一二四一) しるきを見れば夜を更けにける (鳥の名) …… 鶺鴒



(一四二)みだれそめにしわれならなくに (衣の名) …… 文字摺

(一四三)蜘蛛の振舞かねてしるしも (人倫、及び蟲の名) …… 良

人、蜘蛛

(一四四)世に逢ふ坂の關はゆるさじ (何人の境遇なりや) …… 孟

嘗君

(一四五)衣かたしきひとりかもねん (道具の一つ) …… むしろ (筵)

(一四六)もれいづる月の影のさやけさ (道具二つの名) …… たな、

びく

○和歌 下の句、當てもの

(一四七)千早振る神代も聞かず立田川 (植物の名) …… 紅葉

(一四八)わびぬれば身を浮草の根を絶えて (必要品の名) …… 水  
(誘ふ「水」あらば落ちんとぞおもふ)

(一四九)あらざらん此の世の外のおもひ出に (器具の名) …… 琴  
(今一たびの逢ふ事「琴」もがな)

(一五〇)君が爲、惜しからざりしいのちさへ (蟲の名) …… 蜘蛛  
(長くも「蜘蛛」がなとおもひけるかな)

(一五一)人はいざ心も知らずふる里は (蟲の名) …… 蟹 (花ぞむ  
かしの香に「蟹」にはひける)

(一五二)契り置きしとせもが露をいのちにて (獸の名) …… 犬  
(あはれ今年の秋も去ぬ「犬」めり)

(一五三)きりぐす鳴くや霜夜のさむしろに (鳥の名) …… 鴨



(衣かたしきひとりかも「鴨」寝ん)

(一五四)みせばやな小島の蟹の袖だにも(自然物の名)……川

(ぬれにぞ濡れし色はかは「川」らず)

(一五五)今來んといひしばかりに長月の(日用品の名)……マツ

チ(有明の月を待ち「マツチ」出づるかな)

(一五六)天津風雲の通ひ路吹き閉ぢよ(日用品の名)……火箸(乙

女のすがたしばし「火箸」といめん)

(一五七)歎きつゝ、獨り寝る夜の明くる間は(食物の名)……鳥

賊(いか「鳥賊」に久しき物とかは知る)

### 福 引

(一)頼朝公へ諫言(天下の無性「武將」へ諫言)

石鹼へ垢磨りを添へて出す。

(二)蠻地探検(帽劍「冒險」)

(三)和歌(味噌一もじ「三十一文字」)

味噌一しやもじといふ意にて、味噌を杓子へ載せて出す。

(四)二十六夜の月待

誰も更かす「喫かす」といふ意にて、煙草を出す。

(五)隠し笑ひ(薬薬「くすりく」)

健腦丸と、ゼムにても、其の他何にても、二種の薬を出す。



(六)斯う度々近所に火事があられては、實にたまつたものではない

い (金花糖〔近火十〕)

(七)西洋花がるた (十ランプ〔トランプ〕)

(八)法廷の蟲干 (しらすぼし) 法廷干し

(九)オ、怖い (緒、刷毛〔お化け〕)

(一〇)ハイカラー (雪花菜)

ハイ、雪花菜と言つて出す。

(一一)めくらの手柄 (按摩膏〔按摩功〕)

(一二)力彌と小なみ (好い菜漬〔許嫁〕)

(一三)小まへの百姓 (水呑)

水呑 コツプを出す。

(一四)柳はみどり、花はくれなる (柳の方に當つた者へは三種の品

を與へ、花の方に當つた者へは何も遣らぬ)

(一五)姉妹 又は兄弟と (飴と芋と〔姉と妹〕)

(一六)平民的の金庫 (寶珠のたま)

(一七)妹背の契 (芋背の千切り)

大きなふかし芋の背を千切つたのを出す。

(一八)道成寺 (羽根の裏には、かすくござる) 鐘に怨みは數々ご

ざる) 羽根のうしろへ、かすの子を少許添へて出す。

(一九)鐘は上野か淺草か (ポーン)

但し如何なのにも宜し、一箇の盆を出す。

(二〇)うはき娘 (尻が早い)



湯わかしの薬罐を出す。

(二二) 兩人が鹽谷の御家來で (おかる、半ペン) (おかる、勘平) 輕焼煎餅と半ペンとを出す。

(二二) 静岡縣士族 (駿河半紙) (駿河藩士)

(二三) 衣かたしき獨かも寐ん (莖)

『きりぐす鳴くや霜夜のさむしろに』のむしろを取りたるなり。

(二四) 寺の住職 (牛蒡) (御坊)

(二五) 武士の魂 (大小) (曆)

(二六) ますらを (上布) (丈夫)

(二七) 上等の帷子 (葎) (蜆) (越後縮み)

(二八) 十箇月ばらひ (南瓜) (十なす)

(二九) 守銭奴の乾兒 (ハンカーチーフ) 半ケチ、即ち半客齋の意なり。

(三〇) 競賣 (芹、瓜) (せりうり)

(三一) 租税滞納 (紅梅) (公賣) 紅梅焼、又は紅梅餅を出す。

(三二) 大磯の美人 (虎)

はりこの虎を出す。

(三三) 化粧坂の美人 (鹽々) (少將)

鹽を二摘み程出す。

(三四) 忠臣藏 (假名手本)



いろはを書いた手本を出す。

(三五) 忠臣藏大序 (蕪十(兜))

(三六) 同二段目 (マツチ、錐「松きり」)

(三七) 同三段目 (鮒「鮒だ〜」)

(三八) 同四段目 (雪花菜、錐「腹切」)

(三九) 同五段目 (五十兩)

五厘錢一箇を出す。

(四〇) 同六段目 (三瓜「身賣」)

(四一) 同七段目 (干瓢三把、三重に「勘平さんは三十に」)

玩具の重箱三つへ、干瓢三把を入れて出す。

(四二) 同八段目 (南瓜、ごまめ「戸なせ、小なみ」)

(四三) 同九段目 (深編笠に尺八)

米揚げ箆に、火吹竹を添へて出す。

(四四) 同十段目 (棋象「義商」)

象棋の駒を逆さにして出す。

又は『天川屋の義兵衛は五徳(男子)でござんす』といひて、  
五徳を出すも可し。

(四五) 同十一段目 (炭、ピア「炭部屋」)

(四六) 同十二段目 (引揚げ)

釣瓶を出す。

(四七) 鼻ツ風 (風車「風邪」)

(四八) 友白髪 (金婚)



金婚正宗一瓶を出す。

(四九) 瀬をはやみ岩にせかる、瀧川の(茶碗)

割れても末に茶碗(逢はん)とぞ思ふの意なり。

(五〇) 進退維谷(小鞠、錐(困まり切り))

(五一) 助六さん、其鉢巻はえ(醤油(紫))

(五二) 男藝者(太鼓、餅(太鼓持))

(五三) 羽織ゴロ(草紙(壯士))

(五四) 三太夫(鯨(家令))

(五五) 食つては見たし、生命は惜し、(麩九(河豚))

(五六) 目の上の邪魔物(昆布(瘤))

(五七) 湊川神社(軟膏(楠公))

(五八) 天津風、雲の通ひ路吹きとちよ(火箸)

乙女の姿火箸(雲時)とゞめんの意。

(五九) 舊薩摩領の二國(大炭(大隅))

(六〇) 晝は消えつゝ物をこそおもへ(三柿、もり)

『御垣守、衛士の焚く火の夜は燃え』の意にて柿三つと、もり蕎麥とを出す。

(六一) 帝國大學生(掻く棒(角帽))

麻姑の手を出す。

(六二) 支那、朝鮮(蜀黎、獨樂(唐土、高麗))

(六三) 姉をたづねて遙々と(しのぶ)

(六四) 浦里、時次郎(明がらするの名)



(六五) はたらきばえがない (眼鏡)

目が無えの意。

(六六) 大弱り (急須「窮す」)

(六七) 芽出たく、みやこへお歸り (桔梗「歸京」)

(六八) 酉の町の賣れ残り (おかめの面)

(六九) 年増の賣れ残り (豌豆)

縁遠いの意。

(七〇) いやな下駄 (白米「履くまい」)

(七一) 忍ぶ戀路 (傘と草履)

晴れて逢はれぬ。

(七二) 猶餘りある昔なりけり (股引)

股敷 (百敷) や舊きのきばのしのぶにもの意。

(七三) 同上 (股引と頭巾)

股引やふるき頭巾を引つかぶりの意。

(七四) 健筆 (麩、豆)

麩で豆「筆まめ」の意。

(七五) みもち (胡蘿蔔「妊娠」)

(七六) 奥様の御用 (つま楊枝「妻用事」)

(七七) 御やしきの御殿 (捕鼠器)

出んちう (殿中) の意。

(七八) 武士の必要道具 (蕪十「兜」)

又は、かぶとビールを出すも可し。



(七九) いつも御無事(豆)

(八〇) 嫁入道具(長餅[長持])

長く切つた餅を出す。

(八一) かごかき(六尺)

(八二) 懸わづらひ(ぶら提燈)

ぶら提燈の意。

(八三) 神主(葱[禰宜])

(八四) しづか御前(白表紙[白拍子])

(八五) 雲助(籠、柿[籠昇])

(八六) 五月のお節句

(八七) 似たもの夫婦  
勝負(菖蒲)の意にて、散子を出す。

おかめの面とヒョットコの面とを出す。

(八八) 七重八重(やまぶき)

(八九) 菅家(紺足袋)

紺足袋(このたび)は幣も取り敢ず手向山の意。

(九〇) 議員の大禁物  
解散の意にて、甲斐産葡萄酒を出す。

(九一) びつくり仰天(ホヤノ)[オヤノ]

ラムプのホヤ二箇を出す。

(九二) 千歳のよはひ(つる[鶴])



土瓶のつるを出す。

(九三)三景の一つ(箸立て〔橋立〕)

(九四)花はさくら木(鯉節)

人は武士の意。

(九五)可愛い犬(枕二つ)

ワン／＼の意なり。

(九六)花が見たくば(よしの紙)

(九七)缺席裁判(片口)

(九八)もとは御武家(半紙〔藩士〕)

(九七)痴情の果(真鍮〔情死〕)

(一〇〇)おとなしい娘(團扇〔うちわ〕)

(一〇一)虚言(針五本)

五針(偽り)の意。

(一〇二)抜刀隊(ぬきみ〔抜身〕)

(一〇三)星月夜

鎌倉の意にて、玩具の釜と、寶珠代りの土藏とを出す。

(一〇四)源太の名馬(つる、すみ〔磨墨〕)

土瓶のつると、インキを出す。

又は磨る墨の意にて、墨を出すも宜し。

(一〇五)梅雨(墨汁〔陰氣〕)

(一〇六)明日食ふか、いゝや(蒟蒻〔今夜食ふ〕)

(一〇七)東京のまんなか(二本箸〔日本橋〕)



箸一膳を出す。

(二〇八)八月十五夜の月(空樽)

仲空(仲秋)の意。

(二〇九)龜井戸神社

ラン、チン、シヤン「天神さん」の意にて、玩具の三味線

を出す。

(二一〇)地獄の苛責(針の山)

針を一山にして出す。

(二一一)精神修養の第一(國旗(克己))

(二一二)功名(てがら)

婦人の髪飾に用ふるもの。

(二一三)一點の紅唇萬客嘗む(郵便切手)

(二一四)怪美人(花、毛抜)

鼻毛を抜く意。

(二一五)痲癖の強い殿様(切手四枚「斬つて了へ」)

(二一六)五郎、十郎(鏡臺(兄弟))

(二一七)暮春の酒もり(花筵)

花の筵(宴)の意なり。

(二一八)明治の紺足袋(うらじろ)

(二一九)佐倉の義民(櫻草五鉢)

櫻草五(佐倉宗五郎)の意なり。

(二二〇)富士の麓



駿河、貝(甲斐)の意にて、駿河半紙と、貝とを出す。

(一一二二)修身懲役(一合纏)

一往(一弁)詰まらぬの意。

(一一二二)武田信玄(蚊薫し)甲斐武士

(一一二三)高根のさくら(天狗の面)

花(鼻)が高いといふ意なり。

(一一二四)相摸女

頭堅に振る相摸の女の意にて、堅に首を振る土製の女子の  
人形を出す。

(一一二五)以下次號(蜜柑)未完

(一一二六)曾我兄弟の誓(獨活)

獨活(工藤)左衛門祐經の意。

(一一二七)鐵鬼大將(洗ひ粉)荒い子

(一一二八)富の本(石鹼)節儉

(一一二九)名閑老(越中禪)

(一一三〇)名奉行(一膳)越前

大岡越前守の意にて、杉箸一膳を出す。

(一一三一)古今無双の英雄(太鼓)太閤

(一一三二)病氣危篤(半紙半帖)半死半生

(一一三三)十里をば車でわづか一里行き(かち栗)歩行九里

(一一三四)年齢の加減で氣が折れた(碁)將棋(後生氣)

(一一三五)袖臺様の御紋(蛙)するめ



鮭にするめ (竹に雀) は仙臺様の御紋の意。

(一三六) 似合ひの妻を傍に引き附け

おかめ蕎麥を出す。

(一三七) いやな病 (花、柳、鉦)

花柳病の意なり。

(一三八) 花柳病 (傘 [ 徽毒 ])

(一三九) さしも知らじな燃ゆる思ひを (艾)

かくとだに、るやは、伊吹のさしもぐさより取る。

(一四〇) 仙臺侯 (六ツの紙 [ 陸奥守 ])

(一四一) 吉祥寺 (獨樂、米 [ 駒込 ])

(一四二) 可愛い子には (足袋 [ 旅 ])

(一四三) 病氣の合計 (杓子 [ 四百四 ])

(一四四) おこり上戸 (シガレット)

巻いて飲む意なり。

(一四五) 五右衛門 (石、皮 [ 石川 ])

石と竹の皮を出す。

(一四六) 八重垣姫の怨言 (猫)

猫を脊負へとて、お脊中を (回向しようとお姿を) より取る。

(一四七) 佛の顔も三度 (正宗一儼)

お酒の顔もチャントの意なり。

(一四八) 大黒さまのおなら (瓢箪 [ 福尻 ])



(一四九) 夢の如し (酒一升)

一升 (一生) は夢の如しの意なり。

(一五〇) 出雲の大神 (握り飯)

結ぶの神の意なり。

(一五一) 同上 (屑籠)

八百萬の神が集まり給ふの意。

(一五二) チョット小當りに當つて見る (鋸)

木 (氣) をひいて見るの意なり。

(一五三) 藝者のお供 (箱ボールの矢 [箱屋])

(一五四) 時は今 (杜鵑花)

時は今天が下知る杜鵑花 (五月かな) より取る。

(一五五) 三番叟 (煙草と、マツチ)

煙草、火遣ろの意なり。

(一五六) 同上 (とろゝ汁)

とろゝ、たらり、たらりなあより取る。

(一五七) 大々的富豪

大福餅を出す。

(一五八) 女僧 (魚籃 [比丘尼])

(一五九) 勇の兄さん (栗の殻)

栗殻紋々 (俱利伽羅紋々) の意なり。

(一六〇) 三助の足 (赤切れ)

赤い切れを出す。



(一六一)一杯一杯、又一杯(漏斗〔上戸〕)

(一六二)同行二人、歸途は一人(往復はがき)

(一六三)和尚さん(精進揚)

ころもを着て居る。

(一六四)婦人の病氣(尺〔癩〕)

(一六五)お尻の用心(合羽〔河童〕)

(一六六)金鵒勳章(線香〔戦功〕)

(一六七)憫むべし、薄命兒(麩四つ)

麩四合はせ(不仕合はせ)の意なり。

(一六八)井戸端會議(カアノ左衛門〔嬖左衛門〕)

鳥の晝を切り抜いて出す。

(一六九)親の意見も何のその(豆腐に銚)

(一七〇)詩歌(からし漬)

鬼神を泣かしむ。

(一七一)梅の春(つくばね)

『いつか東へつくばねの』より取る。

(一七二)馬の尻(バケツ)

(一七三)三味線(ペン)

ペンを二つ出す。

(一七四)紙幣(おさつ〔薩摩芋〕)

(一七五)子福者(かすの子)

(一七六)三社(浅草紙〔浅草神〕)



(二七七) 上等洋酒

(二七八) パンを三つ出す、シャンパンの意なり。

(二七八) 義太夫の三味線

ズデンデンの意にて、でんぐ太鼓を出す。

(二七九) 慶安時代の豪傑

小説(正雪)の意にて、小説本を一冊出す。

(二八〇) 福の神(塵紙)

(二八一) お祭(鯉節)

出し(花車)が出る。

(二八二) 懸想文(鉛筆(艶筆))

(二八三) ゴールド・リング(金柑(金環))

(二八四) たつた三十錢(蜜柑(三貫))





明治四十三年八月五日印刷  
明治四十三年八月五日發行

笑のくら

定價金參拾錢

著者 夢野浮橋

發行者 山縣文夫

東京府北豐島郡葉鳴町大字上駒込拾九番地

印刷者 內藤聳次郎

東京府小石川區久堅町百〇八番地

印刷所 博文館印刷所

東京府小石川區久堅町百〇八番地

不許複製

發行所

東京府北豐島郡葉鳴町上駒込  
電話下谷四百三十八番

內外出版協會

(振替貯金口座東京三五五番)